

あなたの好きが 未来をつくる

HYOGO
VISION
2050

好きなことから見つけるひょうごの可能性

2050年の兵庫の未来を描く『ひょうごビジョン2050』。今回は、『推し活』『農業×スポーツ』『未来育成』『地域貢献』『まちおこし』に取り組む5人の姿を通して、未来の自分がどのように活躍できるかを一緒に考えてみませんか？あなたの『好きなこと』から広がる未来が、兵庫の新たな可能性を切り開きます。



特別収録

SHIBUYA HAJIME ×

HYOGO VISION 2050

©ANYCOLOR, Inc.

推し活

未来育成



地域貢献



まちおこし



農業×スポーツ



ひょうご
ビジョン
2050

<https://hyogo-vision.com/>

HYOGO VISION 2050

「好き」と出会う ヒントがある！

SHIBUYA HAJIME × HYOGO VISION 2050

渋谷ハジメ

「にじさんじ」所属の人気バーチャルライバー。兵庫県出身の大学2年生で、よく家にひきこもっている。人と直接話すのが苦手で、克服しようと配信にチャレンジ。地元・兵庫県のエピソードも飛び出すトークや、外部とのコラボレーションなど、多彩なライブ動画を配信中！



©ANYCOLOR, Inc.

デジタル・エンターテインメントの世界で活躍するVTuber・渋谷ハジメが語る！「ひょうごビジョン」の可能性。

Q1 兵庫県ではどのように 過ごされていましたか？

昔から興味がわいたものには何にでもふれてみたくなる性格で、特に好きなのは乗り物でした。最初に自分で運転したのはやっぱり自転車。友人たちと一緒に地元のいろんな場所を巡っていましたね。バイクに乗るようになってからは移動距離がぐんと伸びて、須磨や六甲、城崎など、それこそ北から南までツーリングに出掛けていました。スマスイ（現 神戸須磨シーワールド）が大好きで、大人になってからも大水槽をじっと眺めては癒されています。実験的で刺激的な展示に惹かれ、幼い頃からずっと通っていた水族館です。いつかコラボレーションしたいですね！



Q3 ひょうごビジョンに ついて感じられたことを 教えてください。

VTuberは一般的にはまだ認知されづらい存在ですが、ビジョンに掲げる「自分らしく生きられる社会」、「新しいことに挑戦できる社会」をめざして県と手を取り合って、互いの魅力を出し合える、そんな関係になれば素敵だなと思いました。兵庫県には海に山、都会と、いろんな地域があって、たくさんの暮らしやお仕事があります。その分、多様な選択肢と可能性があるので、何にでも興味を持ち、好きなことに会ったら突き詰めてみる。「思い立ったが吉日」という言葉がある通り、まず行動してみることが大事です。その時に、興味や好きなことをしっかり持っていれば、チャンスをしっかりキャッチすることができると信じています。

ひょうごビジョンには、自分が自分らしく、楽しく輝ける場所を見つけるためのヒントがあります。これから何か行動を起こし、アピールしたいと考えている人は、自分が暮らし、活動していくホームだからこそ一度は見て、頼ってみてほしいですね。兵庫県はちゃんと僕たちを見てくれている。ビジョンを知って、改めてふるさととのつながりを実感できました！

Q2 配信活動について 兵庫県から受けた影響は ありましたか？



地元グルメが大好きで市場や商店街などによく行くのですが、関西の人特有の話しかけていただくノリは兵庫県民にもあって（笑）、市場の人がタコの捌き方を教えてくれたことがありました。その時に自分で捌いてみよう、「やったことがないことをしてみよう」という気持ちになれたんです。僕は自分から話すのがとても苦手なタイプなので、自ら人に話しかけることに挑戦すれば、今まで見えなかった部分が見えたり、できなかったことができるようになったりするんじゃないかな、という思いが芽生えたことを覚えています。地元でのコミュニケーションで得たことは、配信活動をはじめる選択ができた自分の一部になっていて、関わってくれた人、悩んでいた時に親身になってくれた人にはとても感謝しています。人とつながれる場所や地域にはいろんな可能性があると感じています。

思い立ったが吉日

インタビュー
動画はこちら



「ひょうごビジョン」には県民が共にめざす様々な未来像が掲げられていて、自分の活動にもフォーカスされるようなテーマもあって驚きました！県下で「やりたいこと」を突き詰めながら暮らす人、それぞれが体現しているビジョンと一緒に見ていきましょう！



ずっと好きだった会社で 好きなものを追求

子どもの頃から家にフェリシモのカタログがあり、「毎回母が決めた予算の中で買い物をするのが楽しかった」という小倉さん。進学し、ひとり暮らしをしてからもその習慣は続き、商品が届くタイミングで帰省していたそうです。ものづくりが好きで、美術大学でガラス工芸を専攻。一日7時間×週6日、工房にこもってガラスの作品づくりに熱中し、自分が一番わくわくするのは実際につくる作業ではなく、頭の中で新しいものを生み出す工程だと気づきました。卒業後は、一番好きな街・京都で就職。おみやげ雑貨を扱うお店で、商品の仕入れや企画、店舗のデザインなどを経験したのち、神戸市に本社を置くフェリシモにキャリア採用で入社しました。「実はフェリシモは新卒の採用試験で落ちてしまって。京都の会社で企画力やプロデュース力を身に付けられたと思ったので、もう一度チャレンジしました」。

現在、メインで担当するのは、生き物や食べ物をモチーフにしたユニークな雑貨ブランド「YOU+MORE! (ユーモア)」。

切断されても再生する不思議な生き物・プラナリアをモチーフにしたグッズ、好きな京都にある老舗喫茶店とのコラボレーショングッズ、大学で打ち込んだガラス工芸のアクセサリーなど、「好き」を突き詰めて商品化につなげています。「好きなものだからこそ、世に出すからには絶対に妥協したくない。今はやりたいことに一番時間を使える会社にいると思います」。

小倉さんの場合は、子どもの頃から好きなことをやり続けたのが、やりたい仕事に近づく道でした。「まずは好きなことに向き合って、選択肢を増やしていったほしい」と若い人たちにエールを送ります。

好きで居続ける
ことで
いつか叶う



HYOGO VISION 2050

自分らしく 生きられる 社会



- 自由になる働き方
- 居場所のある社会
- 世界へ広がる交流

いろいろな価値観を認め合い、様々な選択肢から自らの意思で暮らし方や働き方を選ぶ。居場所と役割があり、多様なコミュニティが活動し、国内外と交流が行われている。そんな社会をめざします。



インタビュー
動画

推し活

好きな人やものを 大切にしたら 毎日がもっと楽しい！

小倉さんが15歳の時にハマったアイドル沼。推しを追いかけ、今では仕事として推し活応援グッズを生み出すようになりました。勤務するフェリシモは、阪神・淡路大震災のあった1995年に本社を神戸に移転。小倉さんが子どもの頃から好きな会社で、好きな仕事に夢中になる毎日です。

推し活を応援する 推し色グッズを企画

カラフルなパスケースやブックカバーなど、“推し”をイメージする“推し色”に彩られ、日常使いきえる小物たち。小倉さんが商品企画を担当するフェリシモの「OSYAIRO (おしゃいろ)」ブランドは、“推し活”する人の気持ちに寄り添う商品を次々と生み出しています。

小倉さん自身も15歳の頃から同じ推しを追い掛けてきました。自分の推し活の失敗を思い出しながらつくったのが、ライブの必需品をひとまとめにするポーチ。ペンライトや双眼鏡に加え、予備の電池を入れられる収納スペースがあります。「家でバラバラにしまうと忘れるので、これさえ持って行けば大丈夫!というものが欲しかったんです。あと、大人のオタクとしては“オタバレ (オタクであることが周囲にバレること)”しないことも重要。推し色で気分を上げつつ、仕事帰りにコンサートに寄るなど、普段から持ち歩ける素敵な小物をめざしています」。

社内部活動・オタ活部で にぎやかに活動中

フェリシモでは、社員が自由に好きな「部活」をつくり、勤務時間の2割までを部活動に充てることができます。部署を超えて部員を集め、商品をつくって売り出したり、イベントを開催したり、ブログ記事を投稿したり。好きなものを社内だけでなく、お客様とも共有しながら活動できる制度があります。

「OSYAIRO」は、社内部活動の「オタ活部 (オタク活動推進部)」から生まれた推し色グッズのブランド。「実はアイドルオタクなんです〜、とオタ活部の部長に話したら、いつの間にか部員に(笑)。部員全員でコンサート会場に行き、市場調査もしてきました。仕事目線で見ると新たな発見がありますね」。新商品をつくる過程では、欲しい色や形などをSNSで広く問いかけ、意見交換もしています。「オタクによるオタクのための居場所にしたいです(笑)。好きの対象は広いので、新しい部員が入ったら幅が広がるだろうなという期待感も。最新のチケットシステムについて教えてもらったり、推しがうちわを見てくれた!という喜びの声に共感したり。会社で仕事として好きな推し活の話ができてうれしいです」。



自分だからできる 得意なスポーツで 農業の新領域へ

若い力や異なる視点が 農業に新たな道を生む

農業とはこれまで関わりがなく、農作業も初めて。先輩に教えてもらいながら、ゼロから知識や作業を覚えていきました。力仕事が多く、夏も冬も屋外で作業する“キツさ”や、全身泥だらけになる“汚さ”は、サッカー選手だった矢澤さんには、それほどしんどいことではなかったそうです。広大な農地では、ドローンでの肥料の散布やトラクターの自動運転など、「スマート農業」も多く取り入れられています。

「ゼロから食材を生み出し、人々の食を支えるのはすごいこと。収穫して終わりではなく、自分たちのもとで形にして、届けたい。付加価値を高めれば、農業を“稼げる”仕事にしていけるはずです」。

最近、元サッカー選手の新入社員が加わりました。また、県内の農業に携わる同世代4人で、「Hyogo Agri Connect」というグループをつくってSNSで発信。若い人たちの就農を応援する会社の立ち上げを計画するなど、縦横のつながりも楽しみです。「農業単体じゃなくて、異なる分野と掛け合わせたら、新たな広がり生まれます。やらない後悔より、失敗しても行動したい。何も知らない自分でも始められた農業に、興味があれば挑戦してほしいです」。

高校の部活やクラブチームに補食のサポートとしておにぎりを届けています。自社でつくった米に、丹波篠山市内や周辺地域でつくられた具材。必要な栄養素を考慮し、練習の前後でメニューを変えているそうです。週末にはキッチンカーに乗り、子どもたちのスポーツイベントの会場へ。食の大切さを子どもや保護者に伝えながら、おにぎりをつくり、販売しています。

契約先チームの子どもたちには、田植えや稲刈りなどの農業体験をしてもらうそうです。自分たちが口にするものがどこでどのようにつくられているのか。農業を通したコミュニケーションの場となっています。



元サッカー選手の経験を 農業に活かしたい！

矢澤さんは元プロサッカー選手。小学校1年生からサッカーを始め、高校は兵庫県下でも有数の強豪校へ。大学卒業後はドイツの下部リーグでプレーし、帰国後はプロリーグ参入をめざす和歌山の社会人チームとプロ契約をし、4年間活躍した後、引退しました。

「『もしあの時ドイツにいたら活躍できていたかも』と後から思うのはイヤだったから、思い切ってトライアウトに挑戦しました。当然、ドイツ語はわからないし、飛行機の乗り継ぎを一人ですることさえ初めて。でも、日本人がいないチームを選び、サッカーを楽しむことができました」。

引退後は指導者のオファーもありましたが、「自分からサッカーを一度取ろう、新しいことに挑戦しよう」と決意。まずは、求人広告の営業を1年間経験し、社会人としてのマナーを身に付けました。次に、サッカーのように熱中できるセカンドキャリアを探すなか、気になったのが「農業」でした。「“3K”（キツイ、汚い、稼げない）と言われることもあり、高齢化が進む分野でもあります。だからこそ、“伸びしろ”を感じました」。

兵庫県の就農支援センターを通じて出会ったのが、アグリヘルシーファーム。代表も学生時代にサッカーに打ち込んできたという縁で面接に進み、「自分にしかできない“農業×スポーツ”に挑戦したい」という矢澤さんの熱意が伝わり、採用が決まりました。

矢澤 貴文さん

兵庫県丹波篠山市

幼い頃からサッカー筋で、ドイツや日本のチームでプロサッカー選手として活躍。引退後は新たな領域に挑戦したいと、経験のなかった農業の道へ。

「思い立ったら行動」がマイルールの矢澤さん。ドイツのサッカーリーグに挑戦した時も、引退後のセカンドキャリアに農業を選んだ時も、新しい道を求めて行動してきました。生まれ育った兵庫県で、農業とスポーツを掛け合わせた新しい事業を社内で提案し、人とのつながりの中で、よりよい形にしていこうと奮闘しています。

おにぎりで栄養補給 子どもたちへの「食育」も

見渡す限り広がる田んぼや畑。矢澤さんが勤務する「株式会社アグリヘルシーファーム」は、丹波篠山市内の大規模農業法人。矢澤さんはここで米や黒大豆の栽培に携わる一方、自ら生み出した新規事業「アグリヘルシーフード」をメインで任されています。スポーツをする子どもたちに地元産のおにぎりを届け、体づくりをサポートする事業です。平日は、県内の中学・



自由な発想で
チャレンジ！

HYOGO VISION 2050

新しいことに 挑戦できる 社会



- みんなが学び続ける社会
- わきあがる挑戦
- わきたつ文化

いろいろな経験ができ、一人ひとり異なる人生の道筋を描ける。教育の形が変わり、生涯を通じて学び続け、新しいことに挑戦し続ける人が増える。兵庫の多彩な文化が地域の魅力を高めるような社会へ。



インタビュー
動画

子どもの持つ力は驚き 好きだから会いに来る

専門学校では動物に関する分野を学び、卒業後は地域おこし協力隊員として豊岡市で3年間活動。子どもの数が少ない地域に移住者を増やそうと、マルシェなど住人同士が顔を合わせられる場づくりを手掛けました。任期後も豊岡市内でコミュニティセンターの支援員と、自然の中で活動する子ども主体の保育の仕事に携わっているそうです。

住まいのある豊岡市からプレーパークの活動場所であるたつの市までは、車で2時間半ほどの道のり。それでも毎月通うのは、ここが上田さんにとっても大切な居場所になっているからだといいます。「スタッフのみんなに会える嬉しさもありますが、子どもたちからもらえる不思議なパワーが何よりも好きなんです。思いきり遊ぶ子どもたちの発想力には、いつもびっくりさせられています」。

個性を活かして チャレンジしてほしい

コロナ禍ではプレーパークも活動を休止しましたが、子どもたちの「寂しい」「また来たい」という声や、スタッフたちの「何としても続けたい」という思いで、一年後に復活。家でゲームやSNSをする時間が増えると、心まで閉じ込めてしまうのでは、と上田さんも心配していたそうです。「自然の中で体を動かして遊んだり、段ボールや木、葉っぱなど好きな素材で熱中して工作したり。そういう場がもっと広がるといいなと思います」。

ここは、やりたいことを思いきりできる場所。自由に遊び、自分のできることの幅を広げていく子どもたちは、とてつもないパワーを秘めています。その姿を見守る大人だって、好きなことを続けていくパワーにあふれています。「誰もが個性を伸ばし、チャレンジする力を付けてほしいです」。



心に寄り添う
リーダー

HYOGO VISION 2050

誰も取り 残されない 社会



- みんなが生きやすい地域
- 安心して子育てできる社会
- 安心して長生きできる社会

すべての人が平等に機会を得られ、安心して生活できる社会です。年齢、性別、障がいの有無に関わらず、誰もが支え合い、参加できる環境を整え、一人ひとりが尊重される未来をめざします。



インタビュー
動画

未来育成

子どもの力に夢中！ 自由な居場所 とともに個性を育む

開かれた遊び場を子どもたちに提供する団体で、ボランティアスタッフとして活躍。子ども時代は人見知りで集団行動が苦手だったという上田さん自身も、自由に遊べる時間と異年齢の人々との関わりから、一歩を踏み出す行動力を身に付けました。その力を子どもたちに伝えると共に、子どもたちからも多くの力を受け取っています。

子どもが責任感を持ち 自由に遊べる居場所

雑木林の中の広場で、思い思いに遊ぶ子どもたち。その動きに目を配り、一緒に遊びながらもさりげなく手助けをしているのが、「子どもの遊び場を考える会 赤とんぼ」運営のプレーパークで社会人リーダーをする上田さんです。プレーパークは、子どもたちが自分の責任で自由に遊べる場所。活動時間の中で、いつ来てもいつ帰っても、何をして遊んでも自由です。高校生から社会人までいる上田さんのようなリーダーたちは、子どもの「やってみたい!」をサポートする役割。「ノコギリなど、使ったことのない道具があっても、全部手伝うのはNG。自分で切るにはどうすればいいか、子どもたちの希望を聞きながら、一緒に考えるのが大切なんです」と教えてくれました。

年齢や性格、得意分野の 違いが世界を広げる

上田さんは子どもの頃から赤とんぼのプレーパークに参加してきて、中学、高校と学年が上がるごとに自然とサポート役に。社会人になってからは、よりリーダーとしての自覚を持って活動するようになったといいます。

「母がスタッフをしていて、小学2～3年生の頃から一緒に付いて来ていました。当時の私は集団行動が苦手で、遊び道具もリーダーもひとり占めするような問題児(笑)。学校以外の居場所ができて、大学生や社会人と触れ合えるのは貴重な機会でした」。

学校に行きづらい時期もあったという上田さん。開放的な空間で自由に行動できるプレーパークには、楽しみながら通うことができました。親以外の大人に叱られたり、一緒に考えてもらったり。そんな経験が積み重なり、心の成長につながっていったそうです。

「プレーパークにはいろいろな子どもたちが来ます。学校や年齢も違いますし、もちろん性格も。来る前から遊び方を決めている子、ずっと同じ場所から離れない子、一人で黙々と作業する子。そういう子もいるからこそ、新しい世界が広がります。一人ひとりの個性を大切にしたいと思います」。



淡路島の中でも古くから発展してきた洲本市で、歴史ある建築物を使った交流拠点の運営を任せ、奮闘する定岡さん。ワークショップやイベントを通じて地元の人や企業を結び、新しいつながりを生み出しています。その忙しい日々を支える原動力や、若い人たちの将来の可能性を広げる試みについてお話を聞きました。

地域交流の拠点を盛り上げるのが仕事

淡路島・洲本市には赤レンガ造りの大きな建物があります。明治時代に建てられた紡績工場の倉庫で、2021年に、地域の交流の場「S BRICK（エスブリック）」として生まれ変わりました。洲本市から委託を受けて運営を担当する株式会社シマトワークスの定岡さんは、この館長さんです。

館内には、地元の食を楽しむチーズ工房&ピ

ザレストラン、子どもたちが自由に遊べる室内広場、創作意欲を満たすクラフトスペース、そして、仕事や学習に利用できるコワーキングスペースなどがあり、幅広い年代の人が集まります。定岡さんはそれらの施設の運営のほか、ワークショップやイベントを企画から考え、広報や当日の開催までのすべての工程を、仲間やボランティアと一緒に手掛けています。



地域の人や企業と協働し新しい絆を生み出す

定岡さんは生まれも育ちも淡路島。地域の伝統的な仕事を知ってほしいという思いから、線香や真珠核をつくる地元企業から廃材を提供してもらいワークショップに使ったり、洲本市の街全体を会場にして、地元の店を回ってもらえるようなスタンプラリーを開催したり、企業とコラボレーションしたオリジナル品を地元のアーティストと一緒につくったり。「参加して楽しんでもらうことは大前提ですが、その先に地元の人々や企業の結びつきをつくりたいという気持ちで企画しています。S BRICKは洲本市が主体となる事業なので、イベントの開催でも、利益より地域貢献を純粋に追求できるんです」。

気になる人とは、できるだけ1対1でコミュニケーションを取るという定岡さん。普段の仕事はとにかく様々な人に会いに行くことを大切にしています。「地域です仕事なので、顔を知っているとみなさん安心されるし、私も人と話すのが楽しくて。事務仕事の時間がなかなか取れないことだけが悩みですね(笑)」。

活発な
リードメーカー



定岡 加祥さん

兵庫県洲本市

会計年度任用職員として洲本市役所で働いていた時に、地域貢献に手ごたえを感じ、2023年に株式会社シマトワークスに入社。広報兼「S BRICK」の施設運営を担当しています。

地元を深く知れば将来の選択肢は広がる

シマトワークスでは、「淡路島クエストカレッジ」という大学生を対象とした域学連携のプログラムを行ってきました。洲本市に住む人や企業から情報や課題を集め、学生たちがチームを組んで一緒に解決方法を探り、チャレンジする力や新たな価値観を育てていく、というものです。

定岡さんはその経験を踏まえ、もっと息の長い関係性を求めて、中高生との連携を重視するようになったとのこと。「コワーキングスペースには自習をする高校生が集まってきますし、イベントの案内や準備をボランティアとして手伝ってもらうことも。地元の高校とのつながりもできて、今は授業の一環で定期的にS BRICKに来てもらい、事業やお金について学べるワークショップを開催しています。より早い段階から地域の仕事を知っていたら、進学先や卒業後の進路選択も変わってくるんじゃないかなと。淡路島の中でも、実はいろんな仕事がありますし、選択肢や可能性をどんどん広げていってほしいです」。

自分たちのコンテンツを育てていきたい

「わくわくするかどうか」を基準に幅広い事業を手掛けるシマトワークスで、定岡さんが一番それを実感できるのは、若い人たちとの関わりだそうです。「初めてのことをやり遂げた時の嬉しそうな表情を見ると、この仕事をしてよかったなと思います。学生のみなさんに伝えたいのは、どんどん失敗してほしいということ。失敗するのは、チャレンジしているからこそ！二度と戻らない今の時間を大切に、いろんなことに挑戦してってください」。自身も新しいことにチャレンジし、自分たちだけのコンテンツを育て、地域とともに自立した会社になることが今の定岡さんの目標です。

HYOGO VISION 2050

自立した経済が息づく社会



- 循環する地域経済
- 進化する御食国
- 活動を支える確かな基盤

デジタル経済、シェアリングエコノミーが進む中、持続可能な経済社会をつくる取り組み。地域に根付く、食・農・エネルギー・文化など生活に密着した産業が成長し、地域の中で価値が循環する自立した社会をめざします。

おもしろい出会いをつなげていけば
地元から世界が広がる！



余白から発信！ 楽しい「自治」の ムーブメント

伊藤 敦紀さん

兵庫県美方郡香美町

京都、東京での社会人生活を経験後、生まれ故郷の兵庫県にUターン。兄弟・いとこと2021年に「一般社団法人HiCO-BAY（ヒコベエ）」を設立。

生まれ育ったまち・香美町の空きスペースを利用した活動で、暮らす人とまちの楽しみ方を共有し、ひょうごビジョンにもある「住民主導・人間中心のまちづくり」を体現する伊藤さん。“楽しいを優先”するまちおこし活動により、地域に新しい波が起きようとしています。

空きスペースの増加を 衰退とは捉えない

伊藤さんが兄弟・いとこたちとまちおこしの社団法人を設立したのは、香美町の祖母の家に集まった時の他愛のない話がきっかけです。「進学や就職などでみんなバラバラに過ごしていましたが、お正月やお盆に香美町で顔を合わせるたびに、あの空き地で何かイベントをしてみたいね、といったことを話す機会が増えました。いろんな意見やアイデアが出るうちに、それぞれが仕事で積んだ経験をまちづくりに活かしたら、という思いを実現する場としてHiCO-BAYを立ち上げました」と伊藤さん。HiCO-BAYが主に取り組むのは、無人になった駅にライブラリーの設置、地下道の壁をペイントするイベントなど、空きスペースを活かしたプロジェクトです。新たな視点でのまちの捉え方を発信しています。



元の姿を知る場所 だからインパクトがある

利用する空きスペースについて、一つだけこだわりがあるとのこと。「ただ空いているという場所ではなく、数年前まで人がいたのに無人になった駅や、近年廃校になった学校などを選んでいきます。記憶のなかでは人がいるけど、今はそうじゃなくなっている。使われていた頃をみんなが知っているからこそ、新しい活用をした時のギャップやインパクトで何か思いが生まれるんじゃないかなと。それを感じてくれた別の人から、また新しいアイデアにつながっていくという流れが理想です」。伊藤さんがそれを強く実感でき、手応えを感じられたのは、廃校で実施した「スクランブル」というマルシェの開催でした。「300人も来場者の方に楽しんでもらえ、自分たちだけでやってきた活動への共感や次回への期待も感じることができました。まちのパン屋さんや焼き菓子屋さんなど、出店してくれた人の理解も大きく、当事者意識、企画側の意識で協力してくれました。今後の展開も考えてくれるなど、自分たちが思い描いている“まちの像”にふれた気がしましたね」。

地域住民が能動的に 楽しみ、暮らすこと

盛況だった「スクランブル」もまだ一回目。もちろんブラッシュアップすべき点もありました。「イベントの最後に、公開大反省会をしました（笑）。大人たちはいろんなことを感じながら思い思いにくつろいで、キャンプのような雰囲気

で過ごしてくれたのですが、子どもたちがもっと楽しめることを増やしたいですね、兄の幼稚園教諭の経験を活かした絵本の読み聞かせや、廃校の中を見せるツアーなど」。また、もっとイベントを気軽なものにしたいと伊藤さんは話します。「最初だったので、カッコリとしたイベントになってしまいました。もう少し軽やかに、趣味で何か作っている人が自分でも出店できそう、と思ってもらえるような敷居の低さをめざしています。もっと広く、参加しやすく、ただ楽しいイベントというよりは“今後も続いていくムーブメント”を作っていけたら一番いいですね。暮らす人と関わる人が能動的に楽しみながらまちを作っていくことが、自分たちの考える“自治”です」。

広い視野で捉えれば 田舎でもできることはある

HiCO-BAYの活動は、楽しいと思ったことをまずやってみることがモットーとのこと。「地域貢献やまちのための活動、という見せ方をすると入り口が狭くなってしまいます。直感的にみんなが楽しめることを展開してみて、結果として生まれた何かが地域にいいことだったら、まちがちょっとでもいい方向に進んでいるということですから」。その上で、香美町ではまだまだできることが多いと伊藤さんは話します。「目的よりも自分のスキルを活かせること、できることを優先して考えたら、それこそ田舎にはまだまだ余白があります。広い視野で捉えれば、田舎こそやりたいことを実現できる場所かもしれません」。伊藤さんの目標は地元を“帰ってきたくなるまち”にすることです。「今、地元でこんなイベントをやっている時期なのに、仕事で帰れない…とうずうずさせたい（笑）。そうできたら、今よりよくなっているまちだと思いますね」と、少しいたずらに話してくれました。



今よりちょっと
いいまちへ

HYOGO VISION 2050

生命の 持続を先導 する社会



- カーボンニュートラルな暮らし
- 分散して豊かに暮らす
- 社会課題の解決に貢献する産業

資源の再利用やエネルギーの自立に取り組み、カーボンニュートラルな暮らしが根付く社会。また、兵庫の多様な地域性を活かした暮らしが各地で営まれ、まちの持続可能性を高める活動が、新しい基幹となる社会をめざします。



インタビュー
動画

ひょうごビジョンって何？

ひょうごビジョン2050

誰もが希望を持って生きられる
一人ひとりの可能性が広がる「躍動する兵庫」

2050年ごろまでに実現をめざす、兵庫の姿を県民の皆様と作成したものです。誰も取り残されず、みんなが希望を持って生きられるという意味の「包摂」と、思い思いのチャレンジができ、一人ひとりの可能性が開けるという意味で「挑戦」の2つを両輪に実現をめざしていきます。



めざす5つの社会

自分らしく
生きられる社会



- 1.自由になる働き方
- 2.居場所のある社会
- 3.世界へ広がる交流

新しいことに
挑戦できる社会



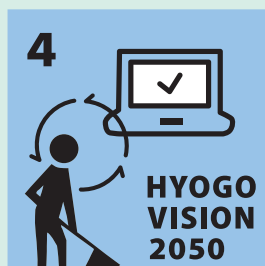
- 4.みんなが学び続ける社会
- 5.わきあがる挑戦
- 6.わきたつ文化

誰も取り残され
ない社会



- 7.みんなが生きやすい地域
- 8.安心して子育てできる社会
- 9.安心して長生きできる社会

自立した経済が
息づく社会



- 10.循環する地域経済
- 11.進化する御食国
- 12.活動を支える確かな基盤

生命の持続を
先導する社会



- 13.カーボンニュートラルな暮らし
- 14.分散して豊かに暮らす
- 15.社会課題の解決に貢献する産業

兵庫県がめざす5つの社会は、未来に向けた地域の発展と個々の豊かな暮らしを描いたビジョンです。それぞれが、自分らしい働き方や挑戦ができる環境を重視し、共に支え合い、誰もが安心して暮らせる社会をめざしています。持続可能な経済や環境の保全、学び続ける姿勢を推進し、地域全体で新しい未来を作り上げることが重要なテーマです。

インタビュー Interview



ひょうごで活躍する人・団体の インタビューを公開中！

兵庫で輝く人々が、それぞれのライフスタイルや挑戦を語ります。仕事や私生活を充実させながら、ひょうごビジョンの実現に向けてどのように取り組んでいるのか、その姿をお届けします。彼らを支える地域や企業の取り組みにも焦点を当て、未来の兵庫での生き方のヒントを提供します。今、あなたの可能性が広がる瞬間を見つけてください。

インタビュー記事



HYOGO VISION 2050

ひょうごビジョン 2050 <https://hyogo-vision.com/>

ひょうごビジョン2050

検索



兵庫県 企画部 計画課

〒650-8567 神戸市中央区下山手通5丁目10番1号
TEL 078-341-7711(代表)

